

一生分の酒飲んだ計算



今年の成人式でも、男子がお酒をラッパ飲みして騒いでいた。酒に強いことが豪快で男らしいとも思っているのか。「カマキリの雄叫びの方がましだ」と、相変わらず他人に敵しいのは悪友とワッシーだ。

そのふたりが飲み過ぎた。ちゃんと家には帰れたが、翌日は、ところどころ記憶が飛んでいる。アルコールは、海馬の神経細胞を麻痺させる。海馬には、近時記憶（出来事を3、4分覚えてる）のうち、重要と思われる情報を選択して側頭葉に送り込む働きがある。アルコールは、その働きをブロ

純アルコール1千規

会話はできる。が、その情報の一部を保存できない。だから、記憶がまだらになる。そんなことを繰り返しては、認知症まっしぐらだ。というのに、まだ、「働いた分だけ酒をのんでやる」とか、「一生に飲める酒は飲み尽くす」などと粋がって、爺様ふたりは握手までしていた。

だが、調べてみると、ひとが一生に飲める酒の量は、純アルコールで約1千觔だそう。それだけでも、アルコールそのものが神経細胞を壊してしまう。そのうえ、肝臓が悪くなればアンモニアや有害なアミンが溜まる。さらに、神経がやられる。

飲み過ぎは認知症に

で、1千觔のアルコールを飲むとなると、日本酒を毎日1升で10年か、ワインならボトル1本で25年飲むことになる。ウーム。ふたりとも、酒を飲み始めてから半世紀以上経つ。計算してみると、もう一生の酒を飲み尽くしてしまっているではないか。

（こは年貢の納め時である。だから、その時は、男らしく禁酒を誓った。というのに、「娑婆のつきあひもあるし、ストレスもある」などと、女々しいのは誰だ。「いや、お酒は飲んでいません。たしなむことにしました」とは、いやらしい。

（石黒修三 しいしくるクリニック
脳神経外科専門医、金沢市在住）